

日本人のみた外国 ベトナムの治安ネットワーク (カルチャー・ショック)

著者	高野 久紀
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	140
ページ	49-49
発行年	2007-05
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005251

ベトナムの治安ネットワーク

高野久紀

ベトナムは、治安の管理に余念がない。金や携帯電話やバイクの盗難、売春などは横行しているものの、治安管理がもつとも奏功しているのは、テロや国家転覆などの犯罪対策だ。これには、共産主義・一党独裁を守るため、という事情もある。

一昔前は、外国人に対する監視の目も厳しく、外国人と話ただけでそのベトナム人は公安から事情聴取を受けていたそう。最近では、対外開放、海外投資受入促進という政策方針から、外国人に対する当局の監視も以前ほど厳しくはなくなったが。

テロや国家転覆などの重大犯罪対策の核心は、地域に張り巡らされた治安ネットワークにある。ベトナムには一種の「隣組」があり、その長が、地域の公安に対して、その地域に不審な人物がいないか、変わった出来事がないかを報告する。新しく引越してきた人がどういふ人かも、公安にすべて報告される。噂話好きな人々の気性も手伝って、個人の日々の行動は、都市部でもかなりの程度筒抜けになっている。だから、テロや重大犯罪を起こしそうな人物は、即公安の監視対象となる。ロシアでのテロ事件を引き合いに出して、ロシアもベトナムのシステムを採用していれば事件は起こらなかったのに、と人々は自慢する。

そんなベトナムの治安ネットワークの洗礼を、私自身も受けたことがある。それまでのゲストハウス暮らしから、新たに一軒家を借りて引越してから、数日後のこと。ちなみに、そのゲストハウスから引越したのは、裏にある公安寮で、毎晩一〇時過ぎまでカラオケをしていてうるさかったから。

その日は引越祝いで、友人たちが集まって一〇時過ぎまで騒いでいた。そして友人たちも帰り、シャワーを浴びて寝ようとした一時間過ぎ、家の電話が鳴った。家の電話番号を知っているのは大家さんくらいだが、と思って電話に出ると、中年の女性の声で、「地域の公安だ」と言ってきた。

その「地域の公安」が言うには、「今日お前の家は遅くまで騒がしかったそうじゃないか。明朝、〇〇通りの公安に来て、罰金を払いなさい」。寮で一〇時過ぎまでカラオケしているお前らは何なんだと思っていると、続けて「お前はどこから来たのか。何をしにベトナムに来たのか。今日家に来たのは誰なのか」と聞いてくる。貧困研究のためにベトナムに来ていること、今日は引越祝いで友達と来たことを話したが、「その外国人の友達はいいが、そのベトナム人の女はもうお前の家に来てはいけない。その女に電話するから電話番号を教えろ」

と言ってくる。なんでお前に人付き合いまで規制されなきゃいけないんだと思って、

「俺の友人は外交官や政治家もいるから、ベトナムの警察はこんなことをやっている」と報告するぞ」と言うと、「明日の朝、やっぱり公安には来なくていい。私がお前の家に行く。その時、私の娘を紹介するから、お前は私の娘を愛さなければならぬ」なんて言ってくる。「何で愛することを強制されなきゃいけないのか、断る」と言うと、「娘はモデルみたいに美しいし、歌も上手だ。会ってみろ」と言う。「どんな娘か知らないが、あなたみたいな母親を持つ娘を愛するなんてごめん」と答えた。そんな押し問答を二〇分以上続けた末、その「公安」は、「私はお前がどういふ人間かを見たかっただけだ。お前の姿も見たことがある。この地域にどういふ人間が来たのかを知るために電話したんだ。罰金も払わなくていいし、公安にも来なくてよろしい。以上」と言って、電話を切ってしまった。

後でベトナム人の友人やベトナム語の先生に話すと、「からかわれたんだよ」と言う。しかし、からかうにしても、一時間半も電話するのはどうかと思うのだが……。

(このひさき／アジア経済研究所地域研究センター)